A. E. Housman の詩の文体について

久我雅絹

I

A.E. Housman(1859—1936)を研究しようとする者にとって、「Two things are desirable for an adequate study of the poetry of Housman: a fair knowledge of English poetry of all periods, and a classical training」という言葉に触れると、多少のためらいをおぼえる。それにもかかわらずいろいろな角度から彼の詩に近づきたくなるのは、一に彼の詩の魅力によるものである。またラテン語学者としては当時ヨーロッパ随一と仰がれ、何事にも厳格で、fastidious といえる彼が、A Shropshire Lad, Last Poems, More Poems, Additional Poems 等に見られる悲哀に満ちた美しい詩を生んだということが、不思議に私の興味を引きからである。

本稿では、彼の詩の文体に注目し、その特徴のいくつかを検討する。なお詩の引用には、次の abbreviation を用いる。

ASL: A Shropshire Lad
LP : Last Poems
MP : More Poems
AP : Additional Poems

II

He stood, and heard the steeple
Sprinkle the quarters on the morning town.
久我 雅紹

One, two, three, four, to market-place and people
It tossed them down.

Strapped, noosed, nighing his hour,
He stood and counted them and cursed his luck;
And then the clock collected in the tower
Its strength, and struck.

—LP xv

彼は立ち上がり　そして塔が
朝の町に四分の一の時をまくるのをきいた
一　二　三　四　と広場や人々へ
塔は時の知らせを投げ下した

ひもで縛られ　輸わをかけられ　最後の時が近づく
彼は立ち上がり時をかぞえて自分の運命を呪った
それから時計は塔の中で
力をこめて八時を打った

これは Eight O'clock という題の作品で、絞首刑をうたったかなり暗く
重苦しい詩であるが、絞首刑や牢獄をうたった数篇の詩（ASL ix, xlvii,
lviii, LP xiv, AP xviii）の中でも、これが特に印象的なのは、用語、音韻、
圧縮された劇的な詩の構成によるものである。

この詩を読むに当って、例えば A Shropshire Lad ix はその理解を助
けるであろう。1 連が 4 行で、全体が 8 連からなる詩で、その第 7 連に
When he will hear the stroke of eight / And not the stroke of nine ; (八時
を打つのはきくが / 九時を打つのはきかないだろう）とある。

ハウスマンの詩には、1 連が 4 行からなる、全体が 2 連で 8 行の短いも
のが多いが、そのような短い詩に比較的秀れたものが見られるようであ
る。The Collected Poems of A. E. Housman (Jonathan Cape) には、そのよ

123
うな詩が37編入っている。それらの中の1編、上記 Eight O’clock の文体にしばらず自を向けることにする。

ハウスマンは用語に関しては非常に慎重であり、本来潔癖な性格が作詩の面でもよく現われている。それは、例えば、この詩の第3及び4行が第2草稿では

One, two, three, on jail and square and people
They dinged down.

となっており、やや重苦しい感じの "on jail and square" が、最終稿では後の "people" にひびいてゆく "to market-place" に変えられている点にうかがえる。

さらにもう一つ "dingled" が "tossed" に変わり、"It tossed them down" の1行となっている。M. Hawkins の調査によれば、ハウスマンは、loosed, spilt, cast, told, dealt, pitched, passed. と書きかえ、ついに "tossed" という語におちついたとのことである。彼女は、これら詩的効果について細かく述べた後

A.E.H. was one of the great perfectionists in the history of English poetry.

といっている。

この Eight O’clock でも、またハウスマンの他のどの詩を見ても、alliteration が著しい。わずか8行の詩でも、stood, steeple, sprinkle/(market)-place, people/nosed, nighing/strapped, stood/counted, cursed/clock, collected/strength, struck と多い。

次に A Shropshire Lad の中から同じく短い詩を一編引用する。

With rue my heart is laden
For golden friends I had,
For many a rose-lipt maiden
And many a lightfoot lad.
By brooks too broad for leaping
The lightfoot boys are laid:
The rose-lipt girls are sleeping
In fields where roses fade.

Ballad 風の素朴な美しい詩であり、あらためて頭韻を指摘するまでもないであろう。軽快な iambic のリズムの中にも青春の暗い影が落ちている。“rose-lipt maiden” とか、“lightfoot lad” は明かるく健康な青春を思わせるが、"By brooks too broad for leaping” にはきまり、“laid”. “sleeping”, “fade” といった用語は単純であるが、いかにも暗い印象を与える。特に [b] の音のくりかえされる第 2 連の第 1 行は、pathos を伴って象徴的である。それは最後の “fade” という 1 語にも含まれており、[d] の音が重くひびき、決定的となる。

上に引用した 2 編の短詩に見られるように、ハウズマンの詩の特徴の一つとして alliteration をあげることが出来る。Norman Marlow も

Housman uses alliteration as forcibly as William Langland..........4
と述べ、さらに、頭韻はハウズマンの詩ではどこでも見られるが、それは決して “conscious artifice” とはなっていないといっている。

用語の完璧さとともに頭韻のすくれた効果については多くの評家の指摘し認めていることであり、もう一人 H.J.C. Grierson の ASL lii に言及し

121
た言葉を引く。

In that (ASL lii), as in all of Mr. Housman’s short poems, it would be impossible to change a word without injury to the perfectly chosen but unobtrusive epithets, without injury to the subtly interwoven alliteration.⁵

頭韻の効果的な使用と並んで、ハウスマンの詩の特徴として単音節語 (monosyllabic word) をあげることが出来る。これは頭韻以上に顕著である。Norman Marlow も指摘しているが、特に単音節の動詞が多い。ハウスマンの詩のきびきびとした簡潔さとそのひびきは、単音節語の使用によるものであり、当然詩全体の韻律を支配している。

例えば、A Shropshire Lad に使われている動詞を見ると、その約80％が単音節の動詞であり、しかも同じ動詞が何回もくりかえし使われている。それはハウスマンが好んであつた俳句の題材にもよるのであろうが、3 回以上使われている動詞をひろってみると, blow, bring, burn, call, come, die, gaze, give, go, hang, have, hear, keep, let, lie, love, look, make, mind, ring, rise, see, save sing, stand, sleep, say, sigh, sound, tread, try, tell, take, wish, watch, wake, wait 等がある。全詩にわたって調べたらどれだけの数と回数になるか見当がつかない。

Stars, I have seen them fall,
But when they drop and die
No star is lost at all
From all the star-sown sky.
The toil of all that be
Helps not the primal fault;
It rains into the sea,
And still the sea is salt.

——MP vii

星が流れるのを私は見た
だが落ちて消えても
久我 雅紹

星空からは
星は一つも失われない
この世のすべての人の労苦は
はじめての適当を救ってはくれない
海に雨が降っても
海は依然塩水だ

今までの動詞について述べたが、この詩では動詞に限らず、“primal”と“into”以外は（compound word の “star-sown” があるが）すべて単音節語で書かれている。これは iambic trimeter の短詩で、虚しさといった一種の諦観をうたったものであり、ハウスマンが好んであつかった題材である。もう一つ単音節語の多い詩の例を引く。

When first my way to fair I took
Few pence in purse had I,
And long I used to stand and look
At things I could not buy.

Now times are altered: if I care
To buy a thing, I can;
The pence are here and here's the fair,
But where's the lost young man?

—To think that two and two are four
And neither five nor three
The heart of man has long been sore
And long 'tis like to be.

—LP xxxv

私がはじめて市に行ったときは
ふところにはほとんど金がなかった
私には買えない物を
長い間立って見ていたものだ
今は花

私は買うことが出来る
金はあるし 今は市だ

だがあの失われた若者はどこにいるのだろう

——二たず二は四であり

五でもなければ三でもないと考え

人の心は長間悲しんで来た

そしてこれからもずうっとそうであろう

わずか12行の詩であるが、“altered”, “neither” 以外はすべて単音節語である。ハウスマンには、人間の愚かさ、虚しさをうたった詩は多く、この詩のすぐ前の LP xxxiv The First of May も fair へ行く若者をうたっている。fair のにぎやかさと人間の sorrow が対照的である。

単音節語については、同じく前出の Norman Marlow も

One of the most striking features of Housman’s poetic style is the high proportion of monosyllabic verbs, and indeed of monosyllables in general. He can get more out of a monosyllable than almost any English poet. ⑥

と述べ、いくつかの例を引き、詳しく検討している。M. Hawkins も、特に文体を論じた箇所ではないが、ハウスマンの内面の葛藤の跡を多くの資料を駆使しながらたどってゆき、ASL xxxi に触れ、その全詩行を引用した後,

In powerful monosyllables Housman creates an image of the eternal struggle of man and nature with the gale of destiny as symbolized by the Romans and the trees in battle and tempest. ⑦

と述べ、詩的効果がその文体に負うところが大きいことを明らかにしている。

今まで見て来たように、ハウスマンの詩の style に関しては、単音節語の使用が一番大きな特徴であり、頭韻以上に詩の効果を力強く出していた。
る。また詩の rhythm と関連し、さらに簡潔さ（terseness）とも関連し、印象を鮮明にしている。

ハウスマンの詩の style に関しては、Fletcher 教授の研究 Notes on Housman’s Poetryは示唆に富むものであり、かなり詳しいが、不思議にも、その第3章 Repetitions and Favourite Turns という章に "no more" という句への言及がない。私がハウスマンの詩を読んでいたとき、この句が何回かくりかえし使われているのに気付き、The Collected Poems におさめられている全作品を調べたところ、30回使われていることがわかった。次に、そのうちのいくつかの例を示す。

まず A Shropshire Lad viii に、朝、若い兄弟2人が草刈りに出かけるが、その草刈りの途中で何かのことで争い、兄は弟を刺殺してしまう。そこで他国に出奔することになり、友への思いを語り、ふるさとに別れをつげるという内容の詩がある。「By now the blood is dried.」（もう血はかわいている）という言葉があり、最後は「And long will stand the empty plate, /And dinner will be cold.」（皿はなさいことからのままで/ ごちそうは冷たくなるであろう）という2行で終っている。この2行は、晩に空しく息子たちの帰りを待っている母親が想像されるばかりでなく、それ以上にこの悲劇を印象深いものにしているすぐれた詩句である。1連が4行からなる全体が8連の ballad 風の詩で、この中で "no more" が2回使われている。

第3行から4行目に、友人 Terence に呼びかける形で

Terence, look your last at me,
For I come home no more.

テレンス、見納めに僕を見てくれ
ぼくはもう二度と帰らないのだから

とあり、第15行から16行目にも

We'll sweat no more on scythe and rake,
My bloody hands and I.
もう鎌やくま手で汗はかかない
この血なまぐさい手もぼくも

となっている。
各々の詩は、全体で一つのまとまった詩となっているのであって、1行とか2行をぬき出してみても、それはあくまで部分であって断片的な姿しか示さないが、以下“no more”の分布を見るため、敢えていくつかの例をその行だけでぬき出すことにする。

There revenges are forgot,
And the hater hates no more.

—ASL xii. 11–2

そこでは復讐は忘れられ
憎む者はもはや憎まない

Such leagues apart the world’s ends are,
We’re like to meet no more;

—ASL xxii. 7–8

何千哩も世界の果は離れているから
ぼくらはもう会うことはないだろう

Fear the heat o, the sun no more

—ASL xliii. 30

太陽の暑熱をもう恐れるな
Duty, friendship, bravery o’er,
Sleep away, lad; wake no more.

—LP xxix. 24

義務も友情も勇気も絶り
ぬりつづけよ，若者よ，もう再び目をさますな

To-day I shall be strong,
No more shall yield to wrong.
久我雅経

Shall squander life no more;

―MP xvi. 8–10

今日ぼくは強くなろう
もう悪にも屈せず
もう人生をむだにはしない

Ask me no more, for fear I shall reply;

―AP vi. 1

もう私にたずねるな、私が答えるといけないから

“no more” という句は各行の終りに現われる場合が多い。この句の意味するところは、一説でいえば、論議であろう。それはときに、はげましの意味にもなるが、それでもなお悲哀に満ちている。

ここにあげた用例の一つ、 “We’re like to meet no more” などは、原詩をはなれてこれだけでも、もの悲しい思いにうたれる。それは元来 “no more” の持つ悲哀感が “meet” と結びついて、いっそう深い悲哀感を生むのである。“I come home no more” も同じである。

ハウスマンは Milton の詩句

Nymphs and shepherds, dance no more—-

は涙をさそうと語っており、その理由はただ詩であるからだといっている。

悲哀は美に通じる。

ハウスマンが詩についてどのように考えていたかは、彼の講演 The Name and Nature of Poetry で詳しく知ることが出来る。詩に対する彼の個人的な趣味があまりにも強く打ち出されている面もあるが、彼の考えを知るために、特に次の一節に注目したい。

……to transfuse emotion—not to transmit thought but to set up in the reader’s sense a vibration corresponding to what was felt by the writer—is the peculiar function of poetry.
ハウスマンの詩の特徴は、彼がくりかえしろうたう、死、罪人、兵士、別れ、青春のはかなさ、人間の懸かさ、自然等といった題材にあるが、それらが彼特有の文体で、緊密な圧縮された詩となっているところにある。
それらを理解し、鑑賞するための一助として、比較的表面に現われた彼の style の極く断片ではあるが、alliteration. monosyllabic word, 及び "no more" という言語的特徴に注目し、その詩的効果について検討した次第である。

注
9. W. Shakespeare : Cymbeline IV, ii, 258—9 ; Fear no more the heat o’ the sun.
11. Ibid., p. 8.

Bibliography
4. V. de S. Pinto : Crisis in English Poetry 1880—1940. Hutchinson, 1958。
7. 矢野峰人：「片影」研究社，1931.

筆者は本学助手・英語